

# 企画展示

「不安」から照らす「生」の諸相×鈴木了二

2022年の立原道造/建築の快樂

1930年代、詩人として、また、建築家としてその才をあらわした早世のひと、立原道造。

意味と音とを不思議に連結させた詩句に本歌をしのばせ、4・4・3・3行のソネットに構築した自在の時空間、それは、「はじまり」と「おわり」、「生」と「死」、あらゆる観念のあわいにたゆたう、透明な「不安」の相貌だった。

建築家鈴木了二氏は、立原の建築の佇まいが、意図的な「うすぼんやり感」を湛えていることに目を向ける。

「無時間。無場所。故郷喪失。無人。身体消滅。無生物の夢みている時間。物質。廃墟。/建築界からすれば、これほどヤバイものばかりを連発し続けた建築家は、さすがにひとりも思いあたらない」、「でも、つくることはいつまでもやめようとしな、そういう建築家だ」（『寝そべる建築』）。

そして、自身との「共振」を感じている。

鈴木了二氏による講演「2022年の立原道造/建築の快樂」、そして、「不安と生の研究会」が、立原道造をとおして繰りひろげる、文学、心理、数理、美術、建築の相互連関的な世界を、ともに逍遙いただければ幸いである。

主催：不安と生の研究会 ・愛知県立大学長久手キャンパス図書館

共催：愛知県立大学全学同窓会

期間：2022年11月14日(月)～12月14日(水)

会場：愛知県立大学 長久手キャンパス図書館 1階ロビー

# 人の心を知ることは……人の心とは……

立原道造「はじめてのものに」

宮崎 真素美(日本文化学部国語国文学科)

## ■不思議の連結

本歌/音/意味/建築  
抒情/構成

### ■花樹

「津村信夫『愛する神の歌』」

昭和10・11 四季社

ドレニッシュイが私に響つて庭を興へた、私はこの庭にながらく住よるであらうか。  
音楽は私にひとつの散歩で、果しない、疲れをさへ知らない散歩で、いつのまにか樹の心に来る。花ひら。私はその花樹の下で多くの言葉を知る。人の心を知ることは、その心を知ることは……。その記憶が私を導き、私は言葉を抱へる。山をとりとへるやうに、言葉は、また時あつて、山鳩のやうな可憐い音をたてる。

## にのものをめじは

ささやかな地味は そのかたみに  
灰を降らした この村に ひとしきり  
灰はかなしい追憶のやうに 音立てて  
樹木の梢に 家々の屋根に 降りしきつた  
その夜 月は明かつたが 私はひとと  
窓に凭れて語りあつた(その窓からは山の姿が見えた)  
部屋の隅々に 峡谷のやうに 光と  
よくひびく笑ひ声が溢れてゐた  
—— 人の心を知ることは……人の心とは……  
私は そのひとが魂を追ふ手つきを あれは魂を  
抱へようとするのだからか 何かいぶかしかつた  
いかなる日にみねに灰の煙の立ち初めたか  
火の山の物語と……また幾夜かは 果して夢に  
その夜誓つたエリ―サベトの物語を綴つた

## 『萱草に寄す』 書影

「立原道造『萱草に寄す』」

昭和12・5 風信子叢書刊行所

■今そおもふいかなる月日ふしのねの  
峯に煙の立はしめけん

「藤原定家『拾遺愚草』」

「谷川俊太郎・吉田文憲『立原道造と私たち』」

『現代詩手帖』平27・3

「立原は建築家でもありませんね。建築の想像力というのには設計段階からすでにそれが壊れた跡、どこか廃墟を宿命づけられている、そんな崩れ去る時間のなかで書いているんですけど、こういう崩れ去る時間のなかで記憶として残つてゆく、積み重ねていくからつて詩も書かれていく。遠い彼方の廃墟のほうからやつてくる見えない非人稱の視線のなかにあつて、いまある、微かに浮かびあがる記憶の残像のよう詩が書かれてしまう。現在という時間もそこにいる自分もすべて過去化される、物語化される。この詩はそうした立原詩のもっている構造をみごとに語っていると思います。」(吉田)

「オレもね、この詩と物理的に似た状況があつたんですよ。立原は長野県側の追分だけ、ほくは群馬県側の北軽井沢に父親の法政大学関係の大学村があつて、そこに赤ん坊のころから行ってたんです。「ささやかな地味は」そのかたみに/灰を降らした」みたいな火山灰が降つてくるのも実際に経験しています。」(谷川)

「もうひとつはほくもそこで初めての恋愛をはじめたんですよ。最初の妻、岸田裕子さんね。だから「窓に凭れて語りあつた」はほくの感じでは絶対に二人なわけね。ほかには詩に書かないと思うんだね。でも重く重く友だちがそこにはいたとしたり、「よくひびく笑ひ声」とはオレは詩に書かないと思うんだね。でもそれを書くあたりは立原とほくで決定的に違うところで、立原のほうはやはり感傷的なんですね。ほくは同じシチュエーションだけど、あまり感傷的にはない。」(谷川)

「立原には戦後詩にあるような自己表現的な追求がないんですよ。そこに共感するんだけど、立原の詩は調べという部分でもほくとどこか共通する気がします。言葉の調べというところ、ふつうはみんな音韻的なことしか考えないですよ。でも立原ははつきりと書いてはなないけど、さつき言つたコノテーション、言語と言語のあいだの結びつきによる調べを感じていたと思うんです。それは意味とはまたちよと違うんだよね。意味を内包している、音韻的なものも当然あるんだけど、もつと深い人間の意識下にある、言語以前のものに触れている調べ。そういうものだと思います。」(谷川)

「ひらがなの「ひと」は恋人のことで、三連目一行目の「人の心を知ることは」の「人」はもう少し一般的に人間について述べたのかなと思います。」(谷川)

「鈴木了二『寝そべる建築 立原道造論』」

『寝そべる建築』平26・6 みすず書房

建築に関する資料が少ないことは最初に述べたとおだ。しかし、残されたわずかのスケッチやエスキスを、少しでも注意深く見れば、そこには明らかに共通の特徴が見えてきたらう。そしてこの特徴は日本の近代建築史のなかに置くと、いや、世界の近代建築史のなかに置いても、相当みずらしいもののように私にはみえるのである。  
それは建築の佇まいが、どことなくうすぼんやりしていることである。線画や着彩などのテクニクが下手というのではない。それどころか学生時代の課題であったボザール風の模写などを見れば、かれの図面表現のテクニクがかなり高い水準であったことがわかる。もちろん、その腕前はそれと認められた。実際に、評点も各年度の最高賞と与えられたという成野吾吾賞を三年たつづけにのトップクラスであった。したがって、この「うすぼんやり感」は明らかに意図されたものでは私には思ふ。むしろ工夫に工夫を重ねた結果なのである。いいかえれば、限りなく薄くなることによって、やつと手にできる透明感であったとしてもおさる。

とくに透明水彩とパステルの使い方が優れていた。デフォーやマクドナルドやクレイなどに通じるものがあり、それはかれらの得意とした薄材が透明水彩であり、水に溶いた薄い顔料を何度も塗り重ねることによって深い透明感を表現できるものであったからだろう。立原の透明への感受性、しかし立原の場合、その表現技術は達者というのと少し違つて、そのときどきに手にした筆や絵の具と無邪気に戯れたといった感じなのであるが。

しかも立原の特徴である「うすぼんやり感」は、たんに線の雰囲気や色彩のなかに感じられるだけではなく、図面から読みとることのできる建築の組み立て方設計の方法まで浸透しているようなのだ。大学三年(一九三六年)の課題「図書館」で、早くも「うすぼんやり感」が横溢している。(中略)

「図書館」は大学で最初に取り組んだ大型の建物の設計であったから、当時の雑誌が作品集に載っていた立原が大好きだったエドワードの図面や写真を製図板のすぐ脇に置いて、きつと写す癖で、それを見ながら設計を進めていたことがない。あまりに似すぎていようにも見え、これではほとんど丸写しではないかと思ふ人がいてもおかしくはない。

しかしここで思い出すべきは、先ほども指摘したように、立原道造が詩の世界では本歌取りの名人であったことである。新古今集でもリルケのソネットでも、本歌をベースにしながらそれを自分の世界に変えることは立原の得意とするところであった。したがって建築でも本歌取りを自覚していた可能性は大いにある。そしてそんなら、立原の計画案や図面がだれかの作品に似ていると指摘したところでさほど意味はないことになる。それに、当時の日本で北方の建築に関心をもちたのは立原だけではなく、村野藤吾や井深次などかだれにもなかつたわけではない。

したがって注目すべきはストックホルム市庁舎と似ていることではなく、それをまろむことこそ驚きながらも立原道造がそこでどれほど違うことを考えていたか、ではなかろうか。エドワードのストックホルム市庁舎はヴェニスのパルラツィオ・ドゥカレやサンマルコ広場に強い影響を受けていることもあり、極めて目立つちががくつきりとしたデザインだが、しかし立原の「図書館」の印象はその点がかかり異なつて、なんとともらえどころがないのである。(中略)

無時間、無場所、故郷喪失、無人、身体消滅、無生物の夢みている時間、物質、廢墟。  
建築界からすれば、これほどヤバイものを連発しつづけた建築家は、さすがにひとりとも思ひあたらなない。出サードがマオリスのスピードのエアスやキダグヤチンばかりなのである。ほかにもスピードを出す近代建築家として思いつづいたところがあるなら、建築は算だいたと言つたアドルフ・ロースと、ほんとうの意味での建築は腐爛なのだと言つたルイス・カーリくらいのものであろう。しかし、このふたりにした創造は断念する。新しいことや前向きなことにはまったくの無関心だ。オリジナリティなど、とうのむかしに忘れていた。ふるさとでもない。自分の身体が消えかかるといって、でも、つくることはいつまでもやめようとしな、そういう建築家だ。

## 建築家ブルーノ・タウトの日本発見

若松伸哉（日本文化学部国語国文学科）

### ◆ブルーノ・タウトと日本

1933年5月、高名な海外の建築家が日本を訪れ、話題となっている。建築家の名前はブルーノ・タウト（1880-1938）。ナチスが政権を握る故国ドイツを逃れ、日本にたどり着き、1936年11月にトルコに向かうため離日するまでのおよそ3年半の年月を日本で過ごしている。日本においてタウトが実際の建築を行う機会はほとんど無かったが、その一方で『ニッポン』（1934）、『日本文化私観』（1936）、『日本美の再発見—建築学的考察』（1939）などの日本の建築に対する著書を著しており、タウトの日本建築評価の特徴として桂離宮に対する賞賛がよく知られている。海外の高名な芸術家による日本文化の伝統美評価は、戦争が近づくなかで日本の文化的ナショナリズムの高揚という時代状況とも相即したものでもあった。そして当時タウトに言及した日本の作家がいる。終戦直後、太宰治らと並んで〈新戯作派〉（現在では〈無頼派〉の呼称が定着）と呼ばれた石川淳と坂口安吾である。



ブルーノ・タウト



桂離宮

### ◆石川淳・坂口安吾とブルーノ・タウト

石川淳の初の長篇小説「白描」（1939）の主要な作中人物として、タウトをモデルとした建築家クラウド博士が登場する。「白描」のクラウド博士もまた桂離宮を賞賛しているのだが、そこでは「民衆的」ということが評価の要諦となっている。タウト自身の桂離宮評価においては、将軍的な日光東照宮に対して天皇的な桂離宮が賞賛されるという図式があるのだが、石川淳は「白描」のなかでタウトを模したクラウド博士から天皇的な日本文化の文脈を抜き取り、その「民衆」性を評価する文脈へと置き換えていることがすでに研究のなかで指摘されている。

一方の坂口安吾は、彼の代表的な評論「日本文化私観」（1942）文中にタウトの名が見られる。「日本文化私観」というタイトル自体がタウトの著作と同名でもあるが、安吾はタウトが桂離宮などに日本の伝統美を発見したことに対して、刑務所やドライアイス工場や軍艦などの「必要」によってのみ作られた実質的な建築物（建造物）の美を主張し、古い建物が焼失しても日本人が必要に応じて作るもののなかに美は宿り、そこにこそ日本の文化や伝統もあることを述べる。

時代状況に包摂される建築家ブルーノ・タウトの日本文化評価の言辞と、そこに反応し批評する作家のあり方がここに見られるが、タウトの桂離宮評価は建築史のなかで改めてその意味を検証されるべきだし、石川淳や坂口安吾の言う「民衆」や「必要」という発想そのものには、機能的合理性の建築に落ち込んでいく陥穽を孕んでいることにも注意が必要であろう。



## “廊下”を心理学的に考える

田上 恭子 (看護学部)

オンラインミーティングにはだいぶ慣れて、結構やれるじゃんと思っているのだが、一向に慣れないのがミーティングの終わり方である。教授会にせよ、研究会にせよ、ゼミにせよ、さっきまで和気藹々と仲良くやっていたのに、「じゃあ、これで終わります」という声と共に、プチッと画面が消え、自分ひとりの部屋に放り出される。これが切ない。長年付き合ってきた恋人から「終わりにしましょう、返信は必要ありません」とたった一通のメールで別れを告げられたような気持になる。

毎日が失恋の連続である。…(中略)…人間は結局孤独なのだと言いつつ日々噛み締めている。

いや、違う。私たちは昔から孤独だったはずだ。どんなに盛り上がる会議でも、研究室に帰れば、最後は一人だった。ゼミにも飲み会にも必ず終わりがあった。だけど、毎回失恋の痛みを感じることはなかった。何が違うのか。

廊下が足りていない。教授会の終わりに、「今日もあの教授のカラオケ状態でしたね」とか「マラカス鳴らそうかと思ったぜ」とか、廊下で愚痴りあうのが楽しかった。雑談も陰口も密談も全部廊下での出来事だった。事件は会議室でも現場でも起こるけれど、人間らしいことは大体廊下で起こっていたのである。

—東畑 開人『心はどこへ消えた?』文藝春秋, 2021年, pp.66-67

上の記述に続いて、半年前に母親を病気で亡くし幼稚園で友達に暴力を振るようになった4歳の男の子とのプレイセラピーが紹介されています。プレイルームの中での遊びとして、その男の子は「トイレ侍」として「ウンコ男」であるセラピストを斬殺し治療し蘇生させるという「聖なる儀式」を繰り返していました。男の子はプレイルームから帰るとき、廊下を使ってトイレ侍の変身が解ける遊びをしていました。「母親を蘇生させることができるプレイルームから、母親がいない現実へとその廊下は続いていた」のです。

臨床心理学者である東畑は、生きるとは変身し続けることであり、そのための場所が廊下だと述べています。廊下は「半分は楽しい教授会で、半分は孤独な研究室」であり、廊下で「少年は母を復活させるトイレ侍でもあり、母を失った幼稚園児でもある」のです。それは必ずしも物理的な廊下に限りません。「遊びによって心に廊下ができるのだ。そうやって、私たちは日々孤独とつながりの間を行き来しているのだと思う」と東畑はまとめています。

この東畑による廊下と遊びについての著述から連想される理論に、英国の小児科医・精神科医であり精神分析家のウィニコットによる対象関係論があります。中でも、「中間領域」「遊ぶこと」などの概念(右図参照)から廊下を心理学的に考えることができそうです。世界のあいだにあり世界をつなぐ“廊下”は、私たちにとって大きな意味をもっている領域であり、そこで遊ぶことがすなわち自分らしく生きることではないかと考えられます。

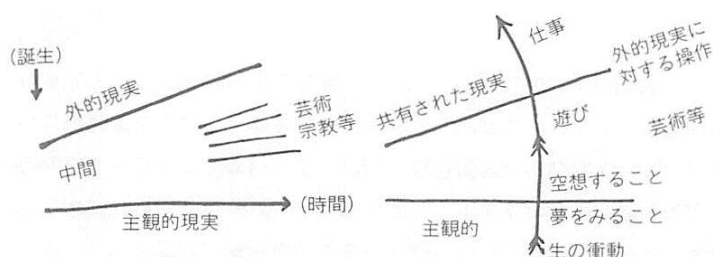


図 ウィニコットの中間領域

(D・W・ウィニコット(著), 北山 修(監訳)『児童分析から精神分析へ』岩崎学術出版社, 1990年, p.99)

**私たちは、移行現象の領域で、主観性と客観的観察が刺激的に織り合わされるなかで、そして個人の内的現実と、外的な世界の共有された現実との中間にある領域で、生を体験するのである。**

—D・W・ウィニコット(著), 橋本 雅雄・大矢 泰士(訳)『改訳 遊ぶことと現実』岩崎学術出版社, 2015年, p.89

じつは遊ぶことって誰にでもできることではない。遊べない人もいる。あるいは遊べないときがある。…(中略)…心が逼迫しているとき、僕らは遊ぶことができなくなる。

だから、「遊びの精神分析」を打ち立てたウィニコットは次のように言っている。

**精神療法は二つの遊ぶことの領域、つまり、患者の領域と治療者の領域が重なり合うことで成立する。精神療法は一緒に遊んでいる二人に関係するものである。以上のことを当然の帰結として、遊ぶことが起こり得ない場合に、治療者のなすべき作業は、患者を遊べない状態から遊べる状態へ導くように努力することである。**(ウィニコット『遊ぶことと現実』五三頁)

ここで語られているのは、遊びの治癒力であり、遊びが二人の人間の重なるところで行われるということだ。ウィニコットはこの二人の重なるところを「中間領域」とか「潜在空間」と呼んでいる。言ってしまうと、遊びとは何かと何かのあわいに生じるものだけということだ。

—東畑 開人『居るのはつらいよ』医学書院, 2019年, pp.152-153

**遊ぶことにおいて、おそらく遊ぶことにおいてのみ、子どもでも大人でも、個人は創造的になることができ、パーソナリティの全体を使うことができる。そして、個人は創造的になることのみ、自己を発見するのである。**

—D・W・ウィニコット(著), 橋本 雅雄・大矢 泰士(訳)『改訳 遊ぶことと現実』岩崎学術出版社, 2015年, p.73

# 住まいにまつわる「話」の数理モデル



情報科学部 奥田隆史

(数理モデルと問題解決)

不安と生の研究会

はじめに : 格言, 戒め, 妖怪など「話」が残されている。これらは人類の膨大な経験値を圧縮し「話」として伝わりやすくしている。住まいにまつわる3つの「話」について数理モデルを利用して思考実験を試みる。

①かなり昔の有名な「話」—徒然草第五十五段 : 現代風の言い方をすると“住まいの設計・建築は夏を考えて造りなさい。地球温暖化により増加傾向の猛暑日に耐えられる住まいが良い。また、必要ない箇所を造っておくと、いざという時に役に立つ。”と述べている。地球温暖化に関する数理モデルは真鍋淑郎先生らにより開発された(2021年ノーベル物理学賞)。いざという時に何を備えるか? ゲーム理論で冷静に考えることができる。

②私はよく聞いた「話」—家は3回建てないと理想の家にならない : 「最も優秀な秘書を見つける」, 「運命の相手を見つける」, 「公共施設の駐車場を見つける」ためにはどのタイミングで決めるか(手を打つか)? 最適停止問題と呼ばれる。最適停止問題は「部屋探してベストな物件を見つける」, 「マイホームとしてどの物件を選択すべきか」という問題にも答えを与える。答えはマジックナンバー3.68, ネイピア数  $e$  の逆数。最初の36.8%ぐらいは見送った後、選ぶのが良いことを示唆している。家は3回(4回は不要)の根拠になりそうだ。

③最近よく耳にする「話」—デジタルツイン, ミラーワールド, メタバース : 実空間・現実空間に対応する仮想空間をネット上に構築することができつつある。仮想空間で経験, 検証後, 現物の家を建築することも可能になってきている。住めば都, 住み慣れると居心地が良くなることもあるとはいえ, 住まいは実際に住んでみないとわかることもある。やはり家は3回建てないと理想の家にならない「話」は継続していくような気がする。

参考文献 (選書の一部より) : 地球温暖化の数理モデル : 『地球温暖化はなぜ起こるのか : 気候モデルで探る過去・現在・未来の地球』(2022), いざという時の数理モデル : 『戦略的思考とは何か』(2019), 最適停止問題の数理モデル : 『アルゴリズム思考術』(2017), 『その問題、数理モデルが解決します』(2018), 『タイミングの数理—最適停止問題』(2000), デジタルツインなど新しい情報技術について : WIRED (ワイアード)。

## 日本美としての「間」と建築

藤原 智也

(教育福祉学部 教育発達学科)

日本の家屋には、もともと「縁側」がありました。靴を履いたまま半身で屋内に腰掛けることができる縁側は、内でも外でもない曖昧な領域であるがゆえに、日本的な人と人との関わりを作ってきました。しかし、この縁側は、戦後、なだらかに日本から消失していきます。それと入れ替わるかたちで、米国式のツーバイフォー工法による建築が増加してきました。

米国人口の約半数はキリスト教徒であり、それを背景とした自由主義的な個人主義が、彼らのコミュニケーションの基礎を成しています。ツーバイフォー工法は耐震性・耐火性・断熱性に優れた機能的住宅である一方、《面＝壁》による遮蔽性の高い建築構造です。壁で遮蔽された個室で個人が聖書に向き合うことで、黙想のうちに神と時空間を共にするという、個人主義の前提をなす宗教的生活様式を支えています。これは、《線＝柱》に基づいた伝統的日本人屋が、温暖湿潤気候のために通気性を良くして四季折々の光と風を取り入れるのと同時に、襖や障子などによって遮蔽性を低めて自然や他者の存在を身体的に感じやすい構造を成していたのとは、対照的です。そこには、自然や他者の気配を読みながら、共感を広げていく接し方がありました。縁側はこの《線＝柱》に基づいた日本建築に組み込まれたものでしたが、1970年代から《面＝壁》に基づいた米国建築を日本に導入していくにつれ排除されていくこととなります。



鈴木了二+吉村昭範《物質試行59 官舎プロジェクト》(2019)

鈴木了二の「物質試行59」では、そういった日本的な縁側や障子を現代的に再考することを主題化しています。そこにあるのは、「外の空間との行き来」であり、襖や障子を取り払ってできる「余白」です。ここには、日本美に通底する「間」の感性があります。日本美術史上でこの「間」の感性を、非常にシンプルなかたちで提示したのが、琳派の創始者である俵屋宗達による「風神雷神図」屏風です。琳派の系譜に連なる、後の尾形光琳による模写(1711年?)や酒井抱一による模写(1821年)があります。それらと比較すると、模写であるにも関わらず、「外の空間との行き来」の面でも、「余白」による空間の広がりにおいても、宗達の作品が秀でているのが分かります。このような感性は、文字言語を媒介にした啓典宗教に属さない、日本で固有に発達した自然信仰の文化の特徴でもあり、そのような美意識は建築や絵画を含む造形一般にも通底しているように思えます。



俵屋宗達《風神雷神図》(1630年代?)